

山田みやこの活動報告

令和4年1月29日(土)

市川房枝政治参画フォーラム「子どもの貧困をめぐる政策」

講師 末富 芳氏(日本大学文理学部 教授)

イギリス・沖縄で生活困窮世帯の子どもたちを朝、家に起こしに行き学校に連れてくる生活支援員の話が学校ですと「それは甘やかしじゃないですか!」と複数の管理職や教員から返される。

学校の先生の発想は日本社会の「貧困」への態度の象徴であり、上記のような世帯に対して「朝起きられない子」「朝ごはんを食べてない子」「宿題をしていない子」と考える。

さらに先生たちは「だらしない」「何回言っても変わらない」「家庭の教育力が低い」という考え方を子どもたちに押し付けているのではないか。「指導」の言葉が心の中にあるだけで子ども・若者には伝わってしまうのに…。日本は子どもたちにやさしく進化しているのでしょうか?

〈コロナ禍の中での子どもの貧困ー政府と社会の貧困ー〉

相対的貧困は貧困を捉える指標の一つに過ぎない。母子家庭の13.3%、ふたり親家庭の0.5%がディーププア。所得があっても貧困問題は存在し、多元的に捉えることが重要。

○多元的貧困の考え方

貧困は所得面だけでは十分に把握できない

4つの次元における貧困に注目

- ①所得 貧困線を下回る
- ②教育 高校卒未満
- ③セーフティーネット 公的年金に非加入
- ④健康 健康面で日常生活に支障あり

○子どもの貧困は子どもの責任か?

再分配前と再分配後の女性の貧困率(2018年)は男性と同様に政府の分配によって高齢者は大きな貧困率の改善は見られるものの、勤労世代・子どもにおいては改善度は小さい。変えるためには何が必要なのか。

「奨学金より自分が自由に使えるお金が欲しい」

「自分のことなんて心配するヒマがない」

「新しい靴が欲しい」

「スマホがない女子高生って生きていけないって知ってますか?」

「フツーに遊んだりしゃべったりできる居場所が欲しい」

そもそも、子ども・若者の本当の声を大人は聞こうとする努力をしていますか?

日本は親子に冷たく厳しい「子育て罰」を課す国。子育ての責任とコストを親にタダ乗りしてきた政治、自分の人権と尊厳が大切にできない大人たち。大人が変わることが子どもも幸せになる社会の前提条件。

「自分は幸せになるべき大切な存在である」これはこの時代を生きるどの大人も子供も同じである。

〈すべての子どもを大切にすることの貧困対策〉

子どもの貧困対策のゴールは、相対的貧困率を下げることで家計の低所得が改善する事でもない。

「すべての子ども」を大切にすることの貧困対策だ。

○支援制度が利用できていないのはなぜか?

「制度の対象外だと思う」

「利用は出来るが特に利用したいとは思わなかった」

「利用したいが今まで自分が利用できる支援制度を知らなかった」

「利用したいが手続きが分からなかったり、利用しにくいから」

○子どもの声をすくい上げる実態調査を!

子どもの声と参画による子どもも政策が、政策の精度を向上させる。子どもが幸せになるゴール(ウェルビーイング)

そのためのスタートラインは《子どもの権利を考えること》《子ども・若者と考え進めること》

※子どもの貧困対策は保護者が低所得であることで拡大するが、困ったら何とかしてくれる大人(社会)がいることでリスクを回避したり、減らしたりすることができる。

すべての子どものウェルビーイング(子どもの幸せ)が実現する状態にすること。